

# 初年次文章表現科目におけるオンライン授業の試み (1)

## —2020年度前期「日本語表現T1」の実践と課題—

外山敦子・小林珠子・近藤さやか・辻本桜子・松原久子・松本明日香  
TOYAMA Atsuko, KOBAYASHI Tamako, KONDO Sayaka,  
TSUJIMOTO Sakurako, MATSUBARA Hisako, MATSUMOTO Asuka

### 1. はじめに

愛知淑徳大学では、大学での学修に必要なライティングスキル習得を目的とした基幹科目「日本語表現 T1」(1 年前期開講/全学部必修/2 単位、以下「本科目」とする)を開講している。本科目は、受講者数 2,019 人(2020 年度実績/単位未修得クラスを除く)を学科専攻別に 80 クラスに分け、稿者ら専任教員 6 人と非常勤講師 8 人の計 14 人が、共通シラバスに基づき同一内容・同一評価で授業をおこなっている<sup>(注1)</sup>。

本科目は、①事実を正確にかつ分かりやすく説明する力、②論理的に自分の意見を述べる力を身につけることに重点を置き、その実践としての小論文を計 3 本作成する。その際重視していたのは、文章を練り上げていく過程の指導である。グループで小論文のアイデアを出し合うブレインストーミングや、草稿を批評し合うピアレスポンスは、初年次生の文章作成スキル向上に資する重要な役割を果たしていた。

ところが、2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からオンラインでの開講を余儀なくされ、本科目もその対応を迫られた。開講主体として最も頭を悩ませたのは、開講規模の大きさゆえの授業運営上の制約と、目指すべき指導内容とのバランスである。

本稿では、2020 年度「日本語表現 T1」のオンライン授業の実践と課題について、特に 2019 年度以前の教室授業のそれと比較しながら報告する<sup>(注2)</sup>。

## 2. オンライン授業への移行

### 2-1. 開講の形態

最優先事項は、「多くの受講生と授業担当者にとって無理のない確実な方法で開講する」ことであった。新入生 2,000 人の IT 環境の全容が 4 月当初は把握できず、授業担当者の ICT スキルにも大差があり、様々なオンラインツールを駆使して全員で同じ授業を展開するには、大きな困難が予想されたためである。よって本科目が採用したのは、教員が事前に用意した講義(資料や動画)を配信し、指定の期間内に学生が閲覧・視聴して課題を提出するという「オンデマンド型」である。本科目の要であるピアワークをおこなうには、通常の教室授業

の形態により近い「リアルタイム双方向型」が望ましかったが、上述の理由により採らなかった。

授業担当者間で統一したのは、①各回の講義と提出課題の内容、②提出課題の配点と評価基準、③提出課題へのフィードバックの実施、の 3 点のみとし、講義の配信手段や使用するツールは各人の裁量に委ねることで、オンライン化に伴う教員の心理的負担を軽減した。結果、講義動画を作成して配信する教員もいれば、動画配信はせず、Word や PowerPoint などを用いて通常よりも綿密な講義資料を作成し、そのみを提供する教員もおり、割合はほぼ半々だった。また、課題の提出方法についても、Word で文書作成を指示する教員と、アンケート作成ツール「Microsoft Forms」を使用する教員とに分かれた。

本学では、オンライン授業用に Office365 のライセンスが用意されたため、授業担当者間の情報交換の手段として「Microsoft Teams」で教員チームを作成した。授業内容や提出課題の採点基準の相談だけでなく、受講生からの質問および回答の共有、オンラインツールの使い方などの相談など、非常勤講師も含めた教員間の意見交換は、むしろ通常授業よりも密におこなうことができた。

### 2-2. 授業計画の変更

2020 年度前期は開講期間が 2 週間短縮されたため、授業計画の一部を変更した(→表 1)。通常 3 本作成する小論文課題を 2 本に減らし、これを補う講義回と学修課題を別途追加した。また、オンライン授業への全面移行に伴って大学全体で課題量が増えることも想定し、受講生の負担を考慮して、通常授業でおこなっていた漢字小テスト(半期 6 回)の実施は見送った。

なお、オンデマンド型を採用したことで、リアルタイムで受講生が意見交換する従来どおりのピアワークは困難になったが、その代替として、「1 人ブレインストーミング」の指導をおこなったり、講義中に受講生の文章を通常よりも多く紹介したりするなど、各教員ができる範囲で工夫を施した。

表1 基幹科目「日本語表現 T1」授業計画（2019年度・2020年度比較）

2019年度	2020年度
1. オリエンテーション	1. オリエンテーション
2. 学術的文章の特徴を理解する	2. 学術的文章の特徴を理解する
3. 文法的に適切な文を書く	3. 文法的に適切な文を書く
4. 書き手の意図を正確に伝える	4. 書き手の意図を正確に伝える
5. 課題（1）小論文を書く―事実と意見の区別―〈準備〉	5. 課題（1）小論文を書く―事実と意見の区別―〈準備〉
6. 課題（1）小論文を書く―事実と意見の区別―〈執筆〉	6. 課題（1）小論文を書く―事実と意見の区別―〈執筆〉
7. 課題（1）小論文を書く―事実と意見の区別―〈推敲〉	7. 課題（1）小論文を書く―事実と意見の区別―〈推敲〉
8. 課題（2）小論文を書く―パラグラフをつくる―〈準備〉	8. 課題（2）小論文を書く―パラグラフをつくる―〈準備〉
9. 課題（2）小論文を書く―パラグラフをつくる―〈執筆〉	9. 課題（2）小論文を書く―パラグラフをつくる―〈執筆〉
10. 課題（2）小論文を書く―パラグラフをつくる―〈推敲〉	10. 課題（2）小論文を書く―パラグラフをつくる―〈推敲〉
11. 課題（3）小論文を書く―研究倫理をふまえる―〈準備〉	11. 説得力ある文章を書く
12. 課題（3）小論文を書く―研究倫理をふまえる―〈執筆〉	12. 到達度を確認する
13. 課題（3）小論文を書く―研究倫理をふまえる―〈推敲〉	13. 授業のまとめ
14. 到達度を確認する	*2020年度前期は開講期間が2週間短縮されたため、講義
15. 授業のまとめ	2回分の課題を別途提示した。

### 3. 受講生の取り組み

本科目では、学生が主体的に講義や課題に取り組むことが出来るよう、ピアワークを積極的に取り入れている。実際に、全15回の授業のうち6回分の講義ではブレインストーミングやピアレスポンスなどを行っている。個人作業がメインとなる講義回においても、学生同士が話し合う時間を設けるなど、積極的に意見交換が出来るような工夫を行っている。学生が取り組む課題の内訳は、全6回の小テスト（各回20問出題。正答数に応じて1点～5点の配点。）、3本の小論文課題（内容に応じて1～10点の配点。）である。小論文は、いきなり清書に取り組むのではなく、アウトラインを作成し、それをもとに草稿を執筆する。完成した草稿を学生同士で読みあいピアレスポンスを行ったあと、清書を完成させる。このように、通常授業では学生同士が協力し講義や課題に取り組むことがメインとなる本科目だが、2020年度前期は新型コロナウイルス感染症拡大に伴いオンデマンド型授業となったため、ピアワークを行うことが困難となった。それに伴い、学生の講義や課題に取り組む姿勢にも変化がみられるようになった。本年度前期に行ったオンデマンド型授業では、講義資料や提出課題の配信方法として、ペーパー（PowerPointやWordで作成し、PDFで配信）を採用する教員と、音声付き動画（PowerPointで作成し、Streamにて配信）を採用する教員が存在した。講義の復習をする場合、ペーパーで配信された場合は時間を要しないため取り組みやすかったという意見や対面授業とオンデマンド型授業とが連続していた際、移動中などに繰り返し閲覧できるため復習する時間を多くとることが出来たとの意見が学生から寄せられた。一方で、文字だけでは理解しきれない部分があり、課題を作成する際に戸惑うことがあったとの問題点を指摘する声も寄

せられた。講義動画を配信した場合には、目だけでなく耳からも内容が入ってくるため理解しやすい、アニメーションで文字が追加されながら一つひとつの説明がなされるため理解しやすかった、などの意見が寄せられた。一方で、学生の集中力や負担の観点から、動画で配信する場合には1本につき20分程度にとどめることが望ましいという意見が教員間で交わされた。

オンデマンド型授業では、学生は配信された講義資料に目を通し、提出課題に取り組むことになる。提出課題は翌週の授業日の前日までに提出しなければならない。課題の提出については、週の後半にあたる木曜クラス、金曜クラスになるにつれ期限直前の提出や未提出が増加する傾向が見られた。また、配信された講義資料を期限直前に見ていると予想される学生が一定数存在したため、配点が大きかったり時間を要する課題内容だったりする講義回であった場合、課題の出来が不十分になるというオンデマンド型授業特有の特徴が見られた。提出課題には、課題作成に加え講義内容を振り返り自身が達成できたこと・できなかったことや講義に対する質問などを記入するための「学修成果欄」が設けられている。「学修成果欄」は対面講義で使用される課題作成用紙にも設けられているが、その記述内容に変化が見られた。具体的には、本欄の記述内容が例年に比べ充実した内容になったことである。実際に、自身の取り組みをより詳細に振り返り、達成できたことや今後の課題を具体的に記述する学生が増加した。また、本欄に質問を記入する学生も多く存在した。対面講義とは異なり、講義の前後や空き時間に教員に質問することが出来ず、学生同士で疑問や質問を共有することも難しいため、本欄を活用し疑問を解消しようとする学生が増加したのではないかと考えられる。実際に、オンデマンド型授業では学生同士が意見

交換を行いながら講義に参加することが困難であったため、「一人だとアイデアが出せなくて困った」、「ほかの人の意見も聞いてみたい」など一人で講義や課題に取り組むことに対し不安を覚える意見が多く挙がった。寄せられた質問に関しては、翌週の講義でフィードバックを行うことにより、学生の講義や課題に対する不安を減少させることに繋がったと考えられる。例年、1本目の小論文テーマは、大学生活を送るなかで気づいた所属キャンパスの長所と短所とを紹介するというものであった(以下「キャンパス紹介」とする)。しかし、本年度はCS紹介<sup>(注3)</sup>へとテーマを変更した。初めて採用したテーマであったため、学生が課題に取り組む際に問題が生じるのではないかと懸念されたが、特定の内容に偏ることや小論文の出来が例年に比べ悪化したということも見られず、問題が生じることはなかった。オンデマンド型授業が開始された直後には、システムの操作方法や課題の作成・提出方法に戸惑う学生が一定数存在したため、教員がメールやチャットで対応することが多かったが、講義を重ねることにより問題なく講義や課題に取り組むことができるようになっていった。オンデマンド型授業を受講したことにより Word や Excel などをはじめとする PC 技術を磨くことに繋がったのではないかと考えられる。実際に学生のコメントでも、「半年間でタイピングが凄く早くなった」など、PC 技術が向上したことを指摘する内容のものが散見された。

オンデマンド型授業となったことにより、不安や戸惑いを見せていた学生が多く存在した。そのため、計画的に講義や課題に取り組むことが出来ず、提出期限間際に課題を提出したり、未提出になったりするケースが散見された。一方で、学修成果欄やメール・チャットを積極的に利用して疑問や不安の解消に努めようとする学生も多くみられるなど、学生間で講義や課題に対するモチベーションに差が見られたことが、本年度の受講生の取り組みにおける特徴と言える。

#### 4. 成績評価

成績は、小論文課題 2 本を含む、13 回の課題の提出状況および課題の点数により評価した。なお、提出課題の評価、配点基準については初回講義、各講義時に明示、説明した。

前年度、本年度の成績評価の内訳を、表 2 に示した。全履修者の成績評価に関して、前年度と本年度を比較した結果、以下のような傾向がみられた。A+、A といった高い評価の学生に関しては、本年度で若干増加傾向にあるものの、大きな違いは見られなかった。一方で、B、C の学生は大きな変化ではないものの、前年度に比べ本年度で減少していた。また、それに伴うように F (不合格) の割合が増加していた。つまり、オンデマンド型の

授業では、教室授業と比較し、中間層以下の学生に成績の落ち込みが見られたといえる。上記の結果は、従来の教室授業で行われていたピアワークによる学びあいが、オンデマンド型では失われたことが原因だと予想される。藤田・山下・西川・石黒 (2017) は、ピアレスポンスなどピアワークを伴う文章表現に関する講義の実施が、受講生の「書く」ことに対する抵抗感の低減に繋がったことを示している。本科目でも、「書く」ことに対して抵抗感を持っていた学生は、例年実施されていた教室授業を通じ、文章作成に対して抵抗感を薄めることに成功していた可能性がある。つまり、ピアワークの実施により、文章作成に対して積極的に取り組むきっかけをつかみ、不成績を回避していたと予想される。本年度は、開講形態がオンデマンド型に変更になったことにより、学生間の教えあいを伴う講義が実施できなかった。そのため、文章作成に抵抗感を強く持っている学生において、単位不認定者が例年よりも多くみられた可能性がある。

ただし、本年度は、例年と授業計画が異なり、それに伴い小論文課題が 3 本から 2 本に減少する等の変化があり、同条件での比較にはならないため、結果の解釈には慎重になる必要がある。

表 2 基幹科目「日本語表現 T1」成績評価の内訳 (全学)

	A+	A	B	C	F	失格
2019	2	23	44	24	3	2
2020	3	26	43	20	6	2

(数値は%)

## 5. 成果および課題

### 5-1. 成果

成果としては、以下の 3 点があげられる。まず、1 点目として、提出課題に設けられた「学修成果欄」の記述内容の充実が指摘できる。グループワークではなく、一人で取り組むことにより、学生が自分自身の文章技術や知識について向き合う機会となった。そのため、自らの課題を自覚し、教員に対して「どのように学修したら語彙力がつくか」、「どのような本を読むと文章力が身につくか」などの質問が多く寄せられた。また、自分の疑問を分かりやすく文章化できない学生においては、オンデマンド型授業であることで質問がしにくかったという意見もあったが、「学習成果欄」や教員へのメールでの質問が増えたことも事実である。実際に、「対面授業であれば、即時に質問できたと思うが、オンライン授業でも質問を記入する欄があったことで、聞きやすかった」という意見があった。講義開始後は、「文字の入力に時間がかかってしまった」という反省や、「編集を有効にする」のやり方がわからないので教えてほしい、「Excel のセル内で改行するにはどうしたらよいか」というような

PC 操作上の質問が多かった。しかし、次第に「[全員～ない]の部分否定の解釈について詳しく教えてほしい」、「一貫性のある観点で書いているか確認してほしい」など幅広い質問が寄せられるようになった。最終回(第13回)のアンケートでは、例年に比べ「T1で学んだことを他の課題で活かせた」という意見が増えた。

2点目として、1本目の小論文で「CS紹介」を執筆したことにより、CSで連絡事項を確認する習慣や機能を操作する技術を身につけることができたことである。愛知淑徳大学に入学後、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策としてキャンパス内に入構できなくなった新入生にとっては、課題を通じてCSの機能を知ることとなった。「身近に使っているものを題材にしたのでわかりやすく、使うときに問題を解決する方法も考えることができた」という意見や、「他学生が書いた小論文の良い例、悪い例を見ることができ、自分の書いた文章を添削出来て、何よりも小論文技術の向上に繋がったと思う」という意見があった。また、「左上にあるレポート提出状況という機能は初めて知った」、「レポート課題の未提出だけを表示できることを知ることができた」など他の履修生の執筆例から知った機能や活用法もあり、役立ったという感想も目立った。

3点目として、履修生が各自の力で課題に取り組み提出したことである。「この講義を機に、文章を書くスピードが速くなった」、「みんなで意見を出し合うことができなかったが、その分自分で様々な角度から物事を見て情報を収集することができたと思う」というように、受講前よりも文章を書く力が身に付いたと実感する感想が大多数を占めた。課題のデータ提出において懸念されていた明らかな不正(コピペ)などはほぼ見受けられなかった。

## 5-2. 課題

オンデマンド型授業特有の問題として、以下の3点が挙げられる。1点目は多くのクラスで週の後半(木、金)になるにつれ期限直前の提出や未提出が増加する傾向があったことである。一方、余裕をもって課題を提出していた学生たちは「本来の授業時間で配信された資料を読み、課題に取り組むように心がけた」と感想欄に回答していた。オンデマンド型授業という形式のため、学修時間を確保した生活を確立できなかった学生がいることを示している。

2点目は、配信された講義を課題提出の期限直前に見ていると予想される学生が一定数存在することで1点目に付随した問題である。オンデマンド型授業ではグループワークが実施できなかったことにより、他の学生の意見や文章に触れる機会が減少したことが挙げられる。講義内容を理解している学生とそうでない学生で、大きな

差が生じた。日本語表現 T1 では2本の小論文テーマを課題として提示していたが、課題のテーマを無視し前回と同じ小論文、あるいは指示した課題内容とは全く関係のない内容の文章を提出する学生もいた。このように指示を未確認の状態で作成する学生も数名おり、他の履修生と内容の確認ができないことによるオンライン型授業の弊害といえる。

また、教室内で行われていた学び合いの機会が得られないことは、他の受講生がどのように取り組んでいるのかわからないという不安に繋がる。そのため、テーマや文章について「良い例」「悪い例」を知る機会が減少するため、講義内で積極的に様々な例を提示することが重要となる。課題の配点が高い、あるいは時間を要する課題内容である講義回の場合、課題の出来が不十分になる。防止策として、講義配信後に課題内容を確認するように呼び掛ける必要がある。

最後、3点目として、学習成果欄(【課題2】)や課題に対するフィードバック(点数や添削)が困難であることが挙げられる。CSを使用した課題配信の場合、フィードバック機能がないため、実際に学生から「自分自身では文章のどこが不適切なのか判断できない」、「得点が分からず、不安である」など不満の声も寄せられた。

以上のような成果と課題がみられた。

## 注

- 1 後続の科目として全学共通履修科目「日本語表現 T2」(1年後期開講/一部の学科専攻は必修、それ以外は選択/2単位)を開講している(本誌「2020年度初年次教育部門〈全学日本語教育〉活動報告」の「1. 開講科目および開講状況」を参照)。
- 2 後続の「日本語表現 T2」もオンラインでの開講となった。本誌「初年次文章表現科目におけるオンライン授業の試み(2)―2020年度後期「日本語表現 T2」の実践と課題―」を併せて参照されたい。
- 3 CSとはCampusSquareという愛知淑徳大学が運営するポータルサイトの略称である。学生は、講義資料や課題をダウンロードする際、CSを使用することが多いため、これを小論文テーマに採用した。

## 参考文献

藤田里実・山下 香・西川真理子・石黒 太(2017)「アクティブラーニングを用いた文章表現教育の効果―文章作成と文章への接触に対する抵抗感の変化に着目して―」『流通科学大学高等教育推進センター紀要』2, 37-48.

執筆分担: 外山(1,2)、小林・近藤(3,5) 松本(4)